走る家族

黒井千次

走る家族

黒井千次

河出書房新社

走る家族
© 1971 Kuroi Senji

昭和46年8月30日初版発行

著　者　黒井千次

発行者　中島隆之

発行所　株式会社　河出書房新社

東京都千代田区神田小川町3－6　振替 東京 10802
電話 東京 (292) 3711　郵便番号 101

印刷　文弘社　製本　若林製本

定価680円

0093—037136—0961

目次

走る家族　5
揺れる家　97

装幀・野見山暁治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

走る家族

走る家族

居間から台所を仕切る半開きの肌色のアコーディオンドアのすぐ前で、今年初めて焚かれる英国製の石油ストーブが青い小さな焔の環をふるわせている。針金で編まれた無数の六角形から成り立つ箱型のカバーが、まだ季節には少し早過ぎるために余計に効率良く熱を放散するストーブをおおっている。アルミサッシュにとりまかれた大きなガラス窓の前にひかれた暗緑色の重そうなカーテンの下に、低くどっしりしたソファーが一つだけ置かれ、そこに坐った二人の男によって燻らされた煙草の煙が水平な層となってゆっくり横に流れ、その端がストーブをおおう金網の上まで来た時、煙は突然吹きちぎられたように天井に駆け上っていく。

いいかい、このストーブは?

買物がちょっと不自由ですわ。

それ、モミのじゃない。

あ、わたしがします。

ガスというのは、結局不経済なのかな。

寒くなるからねえ。

おい、お誕生日にはなにがほしいんだ。
ソファーとむかいあった合板張りの壁につけて置かれた八十八鍵のまだ新しいボックスピアノ。ピアノとソファーにはさまれた空間にはやや大きすぎる木製の低いテーブル。
夏じゅう草が茂って、犬が汚ないことをするし、ねずみが死んでいたり……
そう、少しは暇になったかな。
ぜんたいぼうえんきょう!
小学校にあがるようになったら、考えなくてはね。
ソファーから少し離れ、同じ側につけられた、本棚というよりは物置きになっている区分棚。たたまれた数日分の新聞、上の方に胃腸薬の瓶の水色のレッテル、インクびん、木の救急箱、ハイライトの箱。それとむかいあって、斜めに室内を向いた、足が四本ともはげて白と黒のブチになってしまっているコンソールタイプではない古いテレビ。その上の室内アンテナと黒い電話器。テレビの下に押しこまれているビニール編みの、横に一本紺の線が織りこまれている植木鉢型の紙屑籠。その横からのぞいている平たい箱のような体重計。
全体望遠鏡?
少し暑すぎないこと?
水をくれないか、薬をのむ。
お寒いといけないと思って。
お日様や、星を見るんだ。
まだ何も言ってこないの?

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ふとんの重いのが血圧に悪いって……
天体望遠鏡だろう。
友人の葬式が多くなったよ。
ぜんたいぼうえんきょうだよ。ぜったいだよ。
隣の部屋に置いてある三面鏡の前から運ばれた丈の低い黄色いスツールと、その脇に、今やピアノとは無関係に置かれたピアノ用の丸い腰かけ。ピアノの上には、アンテナを中途はんぱにのばされたトランジスターのホームラジオが置かれ、その横にさめた紫色の香港フラワーが白い籠からこぼれている。天井にはめこまれた四本の螢光燈によって照らされているこの部屋は、もしアコーディオンドアが両側からぴっちりしめられたなら、六畳の広さしかない。様々の家具によっておおわれていない部分は、赤黒いじゅうたんが露出しているが、そこも、椅子にもスツールにも坐っていない二人の子供によってほとんど占領されている。
ありがと。
外に置いておいたら、やっぱりいたむんでしょう。
ばか、望遠鏡でお日様を見たらめくらになっちゃうぞ。
団地までいくとお野菜なんか半値なんですよ。
この前はどうだったの？
え、大丈夫だね。ぜったいだネ。
本当ね。来年は海へ行きたいですわ。
昔は、ここらではうちの中に氷が張ったものよ。

モミはにだんべっど。
風の強い日でね、とうとうノーリターンだった。
消せば寒いしね。
あなた、また煙草が少し多いんじゃありません。
やっぱり飯を食いすぎたな。
ガメラとギャオスとどっちが強い？
ガム食べる。
お茶いれますわ。
寒いんだよ、ほら、ガラスがこんなに曇って来た。
もうけっこうよ。いっぱい。
頭をぶつけるぞ。
暑いなあ。
だめェ。
消しなさいよ。
アイスクリームでも食いたいね。
税金が来るんでしょ。
あ、すこしすすんでるんだ。
アイスクリーム。アイスクリーム。アイスクリーム。
さて、今度はいつ行けるかなあ。

あのお菓子屋さん、おぼえてますか。
気をつけなさいよ。
全体望遠鏡……か。
声が、突然床に落ちた。落ちたまま、じゅうたんの短い毛にねばって動かなくなる。ストーブだけが、金網の中で小さくピチピチ鳴った。その音は、部屋の中の暑い空気に突きささろうとしては、室内の沈黙に押しもどされてすぐ床に落ちた。誰も、何も言わない。子供の手の下のミニカーさえ止っている。部屋が一瞬、宙に浮きあがる。煙草の煙だけが、白く汚れたままゆっくりとストーブの方に吸いよせられていく。口が動かないのではなく、声が出ないのではなく、言葉が落ちてしまったのだ。じゅうたんの上で踏みつぶされたこぼれた飯粒。短い毛の中にぬりこめられた重い粘り。部屋にいる人間の間に突然生れてしまった沈黙の均衡。閉じこめられた焦りだけが、暑い部屋の中にふくらみかえる。それは人と人の間にふくらみ、頭の上まで来てしまった湯のように隙間を埋める。動かない……。じゅうたんの上で、三歳二カ月の女の子のアクビ。床の上にあけられた小さな穴のような赤い口。そこに流れこむようにして、やっと部屋の中に言葉がもどって来る。それはもう、追いかけられた言葉だ。
ネンネの時間でしょう。
帰ろう、そろそろ。
追いかけられ始めた時、言葉は動き出そうとする身体の中でようやく自分の機能をとりもどす。
送っていくよ、車で。
え、クルマ?

モミもいく。
赤黒いじゅうたんの上に動きが激しくなり、一本の指のまわりに白いキイがクルクルとまわり始める。
おそくなるからもういいよ。
電車がなかなか来ないんだ。寒いし。
そうよ、お送りしなくちゃ。せっかく車があるんですもの。
駅まで送ってもらうか。
そんなこといわないで。いくらもかかりませんわ。
子供達が眠くなっているから。
車の中で寝てしまいますもの。
隣室との板戸が開かれ、冷たい空気とともに二つのコートが部屋に持ちこまれる。
え、ママもいくの？　みんなで？
子供達が狭い玄関への戸をあけて押しのけあいながら電気のスイッチにかけよる。コンクリートのたたきに並べられた幾つかの大きい靴と小さな靴。
五人乗りだけど、二人はチビだもの。
チビとはなんだ。あ、キイかして、あけてあげるから。
すぐは寒い。エンジンをあたためるから待っておいで。
オーバーかなんか、いらないの？

庭の片隅に、数本のアカシヤが群生していた。六〇坪足らずの土地の一角に生えている樹木を〈群生〉と呼ぶのはいかにも大げさではあったが、時彦にとっては、この表現は他のものととりかえ難いものであった。一つには、数える程しかない庭木のほとんどが、彼がこの土地に引越して来てから植えた若々しくはあってもまだひ弱な若樹であったのに対して、二階の屋根程もある高さのアカシヤだけはそれ以前からこの土地に根づき、成長し、いわば原生植物の感じで枝を張っていたからであったし、更に〈群生〉という言葉で一群のアカシヤを捉えると、庭の感じがいかにも広々としたものに思えるからでもあった。事実、まだ正確な本数さえ数えたことのないその五、六本のアカシヤの下だけは夏でも土が湿っていたし、今は薄い黄色の落葉によってうっすらとおおわれ、庭の他の部分とは明らかに異った一画を形づくっていた。

今、そのアカシヤの下、横に広くのびた枝の陰に身をひそめるようにして一台の乗用車がとめられているのが見えた。闇の中に白い輪郭をにじませてうずくまっているそれは、車というより一匹の獣と呼ぶのがふさわしいように思われた。あれは俺のものだ、狭い庭を横ぎってまっすぐ車にむかいながら、時彦は暑すぎる部屋で火照ってしまった身体でそっと呟いてみる。すると、獣にも似たその車の存在が一層身近なものに思われた。車は前のバンパーをアカシヤの幹にすりつけるようにしてとめられていた。近づいて触れると、優しい楕円形の落葉を二、三枚のせたルーフはひやりと冷たかった。子供と老人達をのせるまでに早急にエンジンをあたためておかなければならない。外気より更に冷たい感じの車内に身体を入れると、シートはしっとりと冷たかった。チョークを一杯にひき、それを心持ち前にもどす。アクセルに足をのせ、キイをまわす指に

力をいれる。車体は鈍く振動してエンジンは一発で始動した。回転音をききながら、チョークを少しずつもどして回転をさげていく。ライトをつけると、数本のアカシヤの幹が激しい白色に輝いて闇の中に浮かびあがった。車をゆっくり後退させて道の左側にぴたりとつける。これから二人の老人を送っていく道程が時彦の頭の中に次第に鮮明に浮き上ってくる。この時間ならば、もどって陸橋をこえるより、踏切をわたった方が早いだろうか。国道は日曜日の行楽帰りの車がまだあるかもしれないから、脇道を斜めに辿るようにしよう……。

玄関のドアが弾けるように開き、そこから光とともに子供達の小さな姿が声をあげて走り出して来るのが見えた。時彦はシートの背ごしに腕をのばして後ろのドアをあけた。手をあててみると、ヒーターから送りこまれる空気はまだほとんど温たまってはいない。

「おじいちゃん達は?」

子供達はシートの上で身体をはずませたまま、彼の問いに答えようとはしない。車の中では、少くとも俺は運転していることが出来る。子供達の運動のために微かに揺れ続けるシートに背をもたせたまま、時彦はポケットに煙草をさぐった。もし、先程のようなどうすることも出来ぬ突然の沈黙がこの車内に生れたとしても、俺はそれから自由だ。俺には運転という行為があるからだ。しかし、時彦は、形のない暗い不安のようなものが身体の底を静かに通りすぎるのを感じる。ストーブをたかなければ良かったのだ。あんなに部屋をしめきったのがいけなかったのだ。俺の不安は、車に乗ろうとする度に感じる、事故をおこしはしないだろうか、というごく一般的な運転未熟者の不安に過ぎないのだ。スピードというものにつきまとう、快感の裏側にあるあの恐れのようなものなのだ。なかなか温たまろうとはしない車内で、時彦はしかしそれとは別の何

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com